

詩集『ガーリブ詩集』に表れたカイスと ファルハード

片岡弘次

(一) 『ガーリブ詩集』に表れた人物

『ガーリブ詩集』の中にはアラビア・ペルシャ文学の中に出てくる故事来歴に関係した多くの人物が見える。例えば、美男のヨセフや彼を誘惑しようとしたズライカ、あるいは王権を誇り酒の王とされたジャムシード王、シナイ山頂のモーゼ、死者を蘇らせる天使イスラフィール、道案内人のキズル、砂漠を放浪したカイス、ベスヴィオス山を掘り運河を通し新鮮なミルクを得させたファルハードなど多くの人物が見える。だがこれらの中でガーリブは愛の話を語る時、カイスやファルハードを好んで取り上げた。

カイスは、7世紀アラビアのネジド高原のある部族長の息子であったが、他の部族長の娘ライラーを恋し、その名をある詩の中に書いたが、ライラーの一族の名誉を傷つけたとし、求婚を断られてしまった。

ライラーもカイスを慕っていたが、他の所に嫁がされ、カイスは恋の苦しきのあまり発狂し、狂人（マジュヌーン）となって破漠をさまよい、ライラーの幻影を追いつづけた。

一方ファルハードもまた、7世紀頃の人物であった。^{ローカン}石工であったが、アルメニアの王ホスロー・パルヴェーズの妻シーリーンを見て、その美しさにひかれた。彼女を恋する石工の話が国中に広まると、その夫である王は困ってしまい、ファルハードを亡きものにしてしまうはかりごとを巡らした。

これらの話の主人公はウルドゥー文学でも愛の物語の登場人物として有名である。ウルドゥー語詩人もこれら両者を取り上げている。ミール（1723～1810）はカイスを多く、イクバル（1873～1938）は石工ファルハードを多く、現代の詩人ファイズ（1911～1984）は圧倒的にカイスを多く取り上げ、その中で自らの思想を表現している。だがガーリブはこれらの詩人以上に、巧みに両者の人物を象徴や比喩として用い、文学的効果を上げた。

(54) 詩集『ガーリブ詩集』に表れたカイスとファルハード (片岡)

カイス及びそれに関連した事柄は『ガーリブ詩集』の中で27の対句の中に見える。ファルハードの方は10の対句だけで、カイスの方の使用頻度が多い。それを表にすると最後の頁にあるようなものとなる。

『ガーリブ詩集』のテーマの多くは、愛についてであるが、カイスやファルハードが出てくるのは表により、20代の半ばであることが分かる。50代にもカイスやファルハードを使って書いているが、恋愛ではなく当時の社会を述べるものとなっている。例えば

ガザル205—2 1852年

背の高さや髪の毛でカイスやコーカン
は試される
われらがいるところ ここでは首つり台やその綱で試される

ガザル205—3 1852年

石工ファルハードの勇氣は 後で試される
今試されるのは その弱っている方の体だ

これら両詩とも、ガーリブがその社会の一員であったムガル朝の衰退と、19世紀半ばから起こって来るイギリス植民地主義下のインドの様子を述べたものである。

(二) ガーリブと狂人 (マジュヌーン) のカイス

ガーリブは1810年、13歳で2歳年下のウムラーオ・ベーガムと結婚した。相手はデリーに住んでおり、一緒に生活するようになったのは、ガーリブがデリーに定住するようになった1816年、19歳の時からであった。デリーで生活を始めてから間もなく、ガーリブは生涯忘れることのできない恋に陥った。相手は踊り子であったが突然亡くなってしまった。40年後の1860年、友人のムザッファル・フサイン・ハーンにペルシャ語で「彼女の面影が時々目に浮かぶ。生きている限り、彼女のことが忘れられない」と書く程、それはガーリブの心を動かした恋であった¹⁾。

ガーリブの20代における詩には、石工ファルハードに比べ、カイスの方が圧倒的に多く出て来る。カイスは亡き恋人ライラーを求めて砂漠を放浪したが、ガーリブは、ライラーを慕うカイスの中に、踊り子を恋する自分の姿を重ね合せて、カイスの方により多くの親しみを感じていたであろうことは容易に推測がつく。

しかしながら、ガーリブは恋する人ではあったが、恋の病にとりつかれてしまいうタイプではなかった。それをつぎのように表現している。

ガザル56—1 1833年

われらは恋の病いをなおす人 だが

病人が快癒しなくもキリストの治療に何の落度があるか

ガザル149—1 後1821年

われらに愛などない あるのは狂気だけ わが狂気こそ

おまえの名声を高める役をしてしまい

ガーリブの恋は狂気であった。そして恋に狂い砂漠を放浪し、足に肉刺を作ることがガーリブの理想であった。これこそカイスの恋であり、彼はひたすらそれに近づこうとした。その思いをつぎのように述べている。

ガザル3—1 1821年

カイス以外 他の誰も砂漠を歩き回ることができなかった

砂漠と言えど 嫉妬深い人の額の狭さでしかなかった

この対句の中でマジヌーンであるカイスの愛の唯一性を述べている。恋人を探し荒野をさまよう狂人が恋の世界においてガーリブには模範と見えた。だがそのカイスについて他の誰かが同じように述べても説得力がない²⁾。巡礼に行きカーパを目の前に見ながら、引き返してしまう程の精神の自由を失なわないガーリブであったからこそ、その言葉に説得力がある。

カイスとガーリブの精神面における類似性は、両者ともに愛の前に率直に頭を下げることであった。だがカイスの狂気の無謀を弁護しながらもガーリブはカイスに対して皮肉の色をつぎのように浮かべている。

ガザル215—2 1821年

世界中がマジヌーンの狂気の埃だ 完全に

いつまでその埃をライラーの巻髪と考えていられよう どの方が

ガーリブは自尊心が強いことで有名であったが、その好例はつぎのである。

1840年、ガーリブはデリー・カレッジのペルシャ語担当の正教授として迎えられることになった。就任の日、カレッジに出かけると門の所に出迎えの人がいず、「教授として相当な扱いをしてくれない」と怒ってその職に就くことを辞めてしまった。それ程自尊心の強い人であった。だが他の人が持つ優れた点を認める柔軟性をも持っていた。この柔軟性こそが彼を偉大な詩人たらしめたのである³⁾。カイスに関してもガーリブはその偉大さを認め、それに近づこうともしている。

ガザル36—10 1821年

私は恋狂いの人に向って 子供の時 アサドよ

(56) 詩集『ガーリブ詩集』に表れたカイスとファルハード (片岡)

石をぶっつけようとした だが今わが頭が浮かんで来てしまい

ここにガーリブの中に自からの頭をマジュヌーンの頭にしてしまいたいとする
気持が表れている。

マジュヌーンの恋を語る時、ガーリブはマジュヌーンが歩き回る砂漠や荒野にも必ず言及する。砂漠の威厳、偉大さはマジュヌーンがその住人であったことで生じていると考えている。砂漠の輝きもマジュヌーンの目の輝きである。砂漠の生氣はマジュヌーンが存在したことで永遠性を得たと考えている。

ガザル141—6 1821年

おのおのの家は住む人により輝きがあるアサドよ

マジュヌーンが死んでから 森は荒涼としている

ガザル171—4 1821年

カイスの息は砂漠の目や明かりだ

たとえライラーの暗いテントの燭台になれなくてもそれはいい

ガザル229—7 1816年

パルダーをつけないで マジュヌーンの方に行かないでくれ

すべての砂のペールの後に 不安な心があるので

ガーリブはカイスの愛を愛の理想と考え、カイスが砂漠と関係を持っていることに対し敬意を表している。ガーリブにとって放浪の場は、思考の世界であり、やがてガーリブは自我の世界を放浪することになる。その様子が、ガザル92—9 1847年、ガザル157—1 1833年、ガザル175—6 1833年、ガザル203—4 1826年などに見える。

ガーリブの対句の中に、狂気、狂人の手持ち無沙汰、狂人のさまよう荒野、足裏、肉刺などの語句がよく出て来る。これらの語句はカイスやカイスが歩き回った砂漠と関係を持ち、カイスの行動を象徴する語句である。ガーリブの新しさはこれらの語句を用いて連続した意味を持つガザルとさせ、またそれぞれの対句の意味に多層性を持たせていることにある⁴⁾。

ガーリブは家の崩壊を、砂漠や狂人などの語句を使い、つぎのように表している。

ガザル102—3 後1826年

わが家は荒廃の点では砂漠に劣らず だが広さはない

しかしこの砂漠にいると幸なこと あまりの楽しさにわが家を思い出さずすみ

ガザル157—1 1833年

戸や壁から緑が萌え出てしまい ガーリブよ

われらが砂漠をさまよううちに わが家に春が来て

ガーリブの心にひそむ偉大なものと同化したいという願いは、ごく人間的な要求と言える。その願望がガーリブにつぎのように言わせている。

ガザル160—5 後1847年

おまえにわれらもして見せよう マジュヌーンが何をしたか

もしも安らぎが隔れた悲しみの混乱より得られるなら

ガーリブの自尊心はやがて自我の表現に向っていった。ある時は狂気の中で、またある時は砂漠を放浪する狂人となってそれを表現しようとした。かくして、その表現はカイスの心奥にまで深く進入することとなったのである。

ガザル174—1 1816年

わが歩くたび 目的地の遠さが明らかになり

わが歩く速度で逃げて行き 恋の荒野が私から

(三) ガーリブと^{ヨーカン}石工ファルハード

ガーリブは石工ファルハードを狂人（マジュヌーン）のカイスのような愛の高い象徴にはしなかった。カイスの愛は嫉妬する程、価値あるもの、見習うべきものとガーリブは考えていた。だがファルハードに対してはその愛を羨望する代わりにむしろ憐れみや同情を抱いた。そしてその愛を批判的な目で見て、ファルハードを単なるありふれた恋に狂う者としてしか扱っていない。

ガザル37—8 後1847年

仕事に貴賤はない 石工ファルハードを悪く言うな

われら恋に狂う者の中 彼こそわれらのリーダーだ

この「ファルハードを悪く言うな」の言葉の中に、ガーリブの同情が込められている。即ちガーリブはファルハードを恋する者とは考えているが、せいぜい愛の犠牲者ぐらいにしか扱っていない。

ファルハードの手に斧があることはガーリブによって羨ましいことであった。

ガザル176—7 後1847年

斧が石工ファルハードにシーリーンと話し合わせた

何事であれ一芸に秀ずることは いいことだ

ガザル3—6 1821年

斧なしでは死ねなかった ヨーカンは アサドよ

(58) 詩集『ガーリブ詩集』に表れたカイスとファルハード (片 岡)

今までの習わしに幻惑された者でしかなかった

後の対句は、恋していたシーリンが亡くなったとの偽りの言葉を、老婆に変装した使いから聞き、ファルハードが悲しみのあまり斧で自分の頭を打ち、死んだことを表している。本当に恋していればその知らせを聞いただけで死んだ筈であるとガーリブは考える。愛において、その困難に耐えること、そして命を捧げることこそ恋する者の誇りである。だがコーカンにそれがないと見ている。

ガザル58—6 1821年

誰だ 恋の強い酒に立ち向える者は

繰返し登る 酌人の唇の上に その呼び声が 私が死んだあと

ガザル7—1 後1821年

恐怖で死んだ 闘いの準備のない者は

恋とはベテランの仕事 勇者であることを必要とし

ファルハードの愛にガーリブは勇気のなさを感じた。ガーリブの考えでは恋する者は恋の強い酒に立ち向かえる人で、またヴェテランでなくてはならない。

ガザル43—7 1821年

石工ファルハードは アサドよ シーリンの顔を描く単なる絵かきだった

石に頭をぶっつけて死んでしまうようでは 本当の恋人になれない

と言って、ファルハードの行為を皮肉り、軽蔑の感すら表している。

ファルハードの中にある習慣の虜、勇気のなさ以上にガーリブがファルハードを好きにならなかった理由は、愛において自分自身を卑しめる態度であった。

ガザル102—2 後1828年

一方でシーリンに恋し 他方でその夫ホスローの館づくりに精を出すとは

われらは認めぬ 石工ファルハードの行為を善行とは

(四) ガーリブの両者に対する見解

ガーリブは愛の世界で有名な二人の主人公を以上の通り異なった見方で見た。即ちマジュヌーンであるカイスを大胆で勇気ある恋人と考えた。それはガーリブの自由奔放、自尊心を尊ぶ性格とも相通じていた。

一方ファルハードはガーリブの眼には、自尊心のない恋人として映り、憧れの対象とはなり得なかったのである。

『ガーリブ詩集』に表れたカイスとファルハード

カイス (マジュスーン) とその関係			ファルハード (コーカン) とその関係		
初出年	対句番号	キーワード	初出年	対句番号	キーワード
1816	148-3	マジュスーン	1816	1-2	孤独の夜
1816	167-2	マジュスーン			
1816	174-1	荒野, 刺			
1816	191-1	荒野			
1816	191-5	狂人, 荒野			
1816	223-3	砂漠			
1816	229-7	マジュスーン			
1821	3-1	カイス, 砂漠	1821	3-6	コーカン
1821	6-1	カイス	1821	43-7	コーカン
1821	19-3	マジュスーン	1821	58-6	恋の酒
1821	36-10	マジュスーン			
1821	43-2	マジュスーン	後1821	7-1	恋とは
1821	62-3	マジュスーン			
1821	105-1	カイス, ライラー			
1821	141-6	マジュスーン			
1821	171-4	カイス			
1821	215-2	マジュスーン			
1821	215-8	小石, 狂気			
1821	215-11	狂人の手持ち無沙汰			
1826	203-4	運命, 荒廃			
後1826	102-3	荒廃, 砂漠	後1828	102-2	シーリーン, ホスロ ー, ファルハード
1833	157-1	戸, 壁, 緑			
1833	175-6	荒野, 肉刺	1838	122-2	コーカン
1847	92-9	恋狂い	後1847	37-8	ファルハード
後1847	160-5	マジュスーン	後1847	176-7	ファルハード, シーリ ー
1852	205-5	カイス			
1853	209-10	マジュスーン	1852	205-2	コーカン

- 1) Ralph Russell and Khurshidul Islam, GHALIB, GEORGE ALLEN AND UNWIN LTD, London, 1969, p. 42.
- 2) ed. Saiyyid Faiyyāz Maḥmūd, Tanqīd-e-Ghālīb ke Sau Sāl Panjāb University, 1969, p. 596.
- 3) 前掲書, p. 597.
- 4) 前掲書, p. 602.

〈キーワード〉 文学, ガーリブ論, 『ガーリブ詩集』

(大東文化大学教授)